

アダム・スミスの経済学のレトリック

——『国富論』のメタファーとアナロジー——

坂本 幹雄

1. 『国富論』への自然哲学の影響

アダム・スミスの道徳哲学体系に自然哲学がおよぼした影響に関しては、ここ四半世紀ほどの間に「天文学史」を中心とする『哲学論文集』のスミス研究やスコットランド啓蒙の科学の状況に関する研究が進展したことによって、多くの論点が明らかになってきた。とりわけニュートンの影響は一大論点となった。そしてスミスが経済学をはじめとして彼の道徳哲学全体にいたるまでニュートン主義の方法を適用したという点は、学史家によってほぼ了解されつつある。さらにスミスへのニュートンの影響の大きさは学史家以外にもかなり知られるようになってきた。

スミス体系にニュートン力学の方法の影響は確かであり、かつひじょうに大きなものであるが、自然哲学からの影響はニュートンから受容したものがすべてではない。もちろんニュートン力学からの影響がすべてであるなどと誰も主張しているわけではない。しかしニュートン力学の影響の大きさを強調するあまり、他の自然哲学からの影響が軽視されることをおそれる。ケネーがそうであったように、スミスも科学革命の17世紀と同時代の18世紀の自然哲学のさまざまな影響を受けている¹⁾。

スミス研究は、学史における成熟した一大研究分野であり、スミス経済学のレトリックといっても、小論でももちろんそのあらゆる特徴を指摘しようとするわけでは毛頭ない。本稿では、自然哲学との関連を中心としてメタファーとアナロジーの観点から、『国富論』におけるスミス経済学のいくつかの重要学説に対象を限定して考察する²⁾。その主要論点は以下のとおりである。まず第1に、ニュートン力学の影響を検討しスミスの経済力学の特徴を把握する。その際、ニュートン主義とスミスとの方法比較という一般論ではなく、その実際の適用に力点をおく。決着とまではとてもいかないが、この問題に関する今後の研究のひとつの見通しとなるべく努力することにしたい。第2に当時、貨幣論において隆盛であった水力学のアナロジーのスミスにおける利用をみる。そして第3に生物学・生理学などの有機体のアナロジーをみる。すなわち18世紀のスミスに「経済生物学のメッカ」を求めてみよう。さらにあわせて力学にも生物学にも共通する重要な概念が循環（流通）概念であることを強調したい。まずはこの点を章をかえて先に提示することにしたい。

2. 『国富論』における循環概念の意義

本稿では『国富論』における循環概念の意義をローリー (Lowry 1974) とオルボーン (Alborn 1994) とによって考察することにしよう。ローリーは「経済理論における循環概念の考古学」の中で、「18世紀における循環概念の適用」として古代ギリシア思想から近代にいたるまでの循環概念を探索している。ローリーによれば、この循環概念史においては、「循環分析をあらゆるプロセスの普遍的な説明の本質の地位にまで高めた」ピタゴラス主義という数学的神学的背景と「本来、事物は直線上を動く傾向があり、円の完成はある合理的な力の介入を必要とするがゆえに、循環的配置は、創造主の介入を必要とする「導きの手」の証拠であった、という意味で、ルネサンスを経て啓蒙思潮」にいたるプラトン主義の伝統という2つの要素が重要である (Lowry 1974. p. 430.)。ローリーは、この合理的な神の計画のプロセスという循環概念の例として17世紀の医学者トマス・ブラウンをあげている。ブラウンは円のメタファーを通して天文学と解剖学とを結びつけた。古代思想のマクロコスモスとミクロコスモス、すなわち大円とその中の小円、この両方とも「神の見えざる手によって動かされている車輪」のメタファーである。天文学と解剖学は、この古代思想の概念と一致している。「ブラウンにとって、ミクロコスモスは、メタファーでもあり、根本的真理の言明でもあった。」 (Ibid.)。そして、ローリーは、このような思想パターンの影響を18世紀のスミスについて評価しようとしても想像の域を出ないが、「スミスが『国富論』の中で用いた「見えざる手」により統御された循環プロセスの概念は、16・17世紀の文芸上の伝統の中では、ありふれた言い方であった」と述べている (Ibid., p. 431.)。ローリーが具体的にあげたのは、貨幣＝「流通の大車輪」 (WN II. ii. 14. 訳 I. 442頁) だけであるが、しかし『国富論』全体にはこの循環概念が充溢している。スミスはこの循環概念に支配されて理論を展開している。本稿ではこの点を具体的に確認し、伏在する問題点の剔出をめざすことにしたい。

このようなスミスの循環のメタファーとアナロジーにおいて、とりわけ注目したいのは自然に関する言語と機械に関する言語の混在である。時計と時計製作者のように機械論は陰に陽に神学概念を反映している³⁾。しかしオルボーンがテーマとし、強調したように、機械は産業革命期には蒸気機関というような具体的な機械そのものを意味するようになってくる。機械は神なる製作者による時計という神学的含意をもつものではなく、可視の人為的な操作・介入・規制の意味を強めてくる。スミスにもそのようなものがありはしまいか。オルボーンによれば、この循環言語は、論争言語として、18世紀から19世紀にかけては身体言語と機械言語とが混乱していたが、19世紀になって次第に対立して使われ、やがて機械言語が支配的に広く使われるようになった。オルボーンは19世紀後半の J. S. ミルの時代に市場というレッセフェールの自然法則とそれに対する人為的な制限が認められるようになって、そうしたアナロジーは終息すると見ている。いまオルボーンの対象とするスミス以後の具体的問題は当面の課題からはずそう。そこでポイントは、市場という自然法則の世界と政府という機械操作の主体、すなわち自然と人為、市場と政府という分節による一大把握は、19世紀後半以後のひじょうに現代的なひとつの整理された観点

である、ということこれである。したがってこれだけで18世紀のスミスを見ては面白くない。

スミスの学問体系においては、巨大な機械としての自然と社会、自然体・身体としての国家、機械＝身体、そして人間による操作・介入としての機械、これらがいまだ混在して、時に自然と人為とが緊張関係を示している⁴⁾。以下に具体的に考察対象としてとりあげる項目は、分業論・交換論、自然価格論、資本投下の自然的順序論、貨幣論、金融市場論、経済政策論、および植民地貿易批判である。本稿ではこれらの諸側面をスミスのメタファーとアナロジーの構造に着眼してその特徴づけをすることにしたい。

3. 分業論の方法—ニュートン主義か

まず本章から第6章まで、『国富論』におけるニュートン力学の影響を考察することにしたい⁵⁾。ニュートンの影響を冒頭に分業論にあると強調したのはヘザーリントンの『アダム・スミスの経済学へのアイザック・ニュートンの影響』(Hetherington 1983)である。本章ではこのヘザーリントンによるスミス分業論のニュートン主義解釈を検討する。

ヘザーリントンによれば、スミスの分業論は、『プリンキピア』と『国富論』間の構造的・方法論的類似性⁶⁾を示す「最良の例証」である (Ibid., p. 505.)。ヘザーリントンは「現象から帰納によって原理を立てることに進み、次にその原理から現象を演繹する方法は、ニュートン、スミスの両者に見られるものである」と述べている (Ibid., p. 504.)。第1編第1章のピン製造業の分業分析が言うところの現象の提示であり、第2章が分業の一般原理であり、そしてスミスはこの原理から交換性向や分業の帰結が狩猟民や牧畜民に見られることを示している (Ibid.)。

さらにヘザーリントンによれば、スミスとニュートンとの類似性は、発見した一般原理の究極的性質に対する態度にさえ見られる (Ibid.)。ニュートンは、重力作用を説明するような力学モデルを提示できないために重力法則が観察された諸現象を説明することを示すだけで十分だと結論せざるを得なかった。これに対応する『国富論』分業論におけるスミスの態度が現われた文章は次の部分である。

「いったいこの性向は、これ以上は説明のできないような人間本性にそなわる固有の原理のひとつなのか、それともこの方がいっそう確からしく思われるが、理性と言語という能力の必然的帰結なのか、この問題はわれわれの当面の探究課題には属さない。この性向は、すべての人間に共通なものである。」(WN I. ii. 2. 訳 I. 24頁)。

このようにヘザーリントンによれば、スミスの方は、交換性向が、人間本性固有の原理のひとつなのか、それとも理性と言語という能力の必然的帰結なのか、決定できないために、この問題は「われわれの当面の探究課題には属さない」と結論した。スミスにとって、その性向がすべての人間に共通であるというだけで十分なのである (Hetherington 1983, p. 505.)。以上のように、ヘザーリントンは、現象の本質は問わないとするニュートンの不可知論的態度に、スミスが同調していたと見て、ニュー

トン主義者スミスを描いている。

さてしかし、スミスは理性と言語に対して「この方がいっそう確からしく思われる」とも指摘している。スミスは交換性向がすべての人間に共通であるとして、この点に関して議論を打ち切ってはいない。交換論においては、理性と言語の問題は実際には決定的に重要な問題となってくる。言語による説得手段、言語コミュニケーションが交換論のひとつの答えである。この点はスミスの動物行動論の問題であり、第9章でとりあげることにして、このテーマに立ち入る前にニュートン主義の問題についてさらに本稿の中心的な論点に進むことにしよう。

4. 自然価格論(1)―重力か渦動か

自然価格論⁶⁾は、ニュートンの重力のメタファーの代表例として経済学者によく引用されている。ニュートン研究の側からの自然価格論に対する評価はどうであろうか。著名なニュートン研究者コーエンの見解 (Cohen 1994) があるので、本章ではまずそれを確認しておこう。「自然価格は、いわば中心価格であって、そこに向けてすべての商品の価格を絶えず引きつける」(WN I. vii. 15. 訳 I. 99頁) という自然価格論は、コーエンによれば、「不完全な模写の一例」である。まず「何らかの「中心」に向かって「すべてが絶えず引きつけられる」というスミスの概念は、明らかに「あらゆる」物体に作用しているニュートンの「重力」の類似物である」(Cohen 1994, p. 65.) と基本的なところをコーエンは認めている。すなわち「スミスのアナロジーは、「中心の」太陽に向かって引きつけられる「あらゆる」物体（惑星・衛星・彗星等）からなる太陽系というニュートンのイメージをただちに想起させるものである」。ここまではよい。しかしニュートンの重力の性質の中には、物体を引きつけるあらゆる組合せの間に相互に作用する性質、つねに等しい反対の力が存在している。問題は、スミスがこの特徴を無視してしまった点である。それゆえコーエンによれば、自然価格論がニュートン力学との完全な「ホモロジー」であれば、「自然価格もまた他のあらゆる価格に向かって引きつけられなければならない」(Ibid., p. 66.)。コーエンは、このようにスミスのニュートン力学理解は誤りではなく、ただ不完全なだけであったと評価している。しかしコーエンは、このスミス自然価格論の重力理論としての不完全さの中に「創造的転換」(Ibid.) を見て取り、スミスが、ニュートン力学を一部しか利用していないからといってそれを責めた経済学者にも出会ったことはないとして、結局「スミスは意図的に創造的転換をしたのか、それとも単にニュートン物理学の不十分な大家であったのか、という問いを筋違いにするほど、ニュートンの重力という力の概念に関するスミスの不完全な模写は、彼の経済学体系の真価によって十分に正当化されている」(Ibid., pp. 67-8.) と好意的な評価を下した。

次にニュートン主義者スミス像が主流であるなか、少数見解はどうだろうか⁷⁾。この中でとりわけ奇抜で面白い解釈が、スミスは実際にはニュートンには興味がなくデカルトに依拠していたとするフォーリーの『アダム・スミスの社会物理学』(Foley 1976) である。このデカルトの影響を指摘した先駆的著作において、フォー

リーは、経済学を含めてスミス体系はニュートンの重力理論ではなく、古代ギリシア自然哲学とデカルトの渦動理論のアナロジーであった、とその圧倒的影響を主張して、果敢にデカルト主義からの統一的解釈を行っている。自然価格論も最初からニュートンの重力のメタファーではなく、デカルト渦動理論のメタファーで描いている (Ibid., p. 166.)。

5. 自然価格論(2)―重力のメタファー

自然価格論のニュートン主義をおそらくもっとも具体的に検討した論考のひとつと目されるのが、ワーランド (Worland 1984) である。ワーランドは、スミスの『国富論』の価格理論へのニュートン『プリンキピア』の運動の定義と3法則の適用可否を検討した。本章と次章ではこの徹底的にニュートンの方法にしたがったモデルを規準としたワーランドによるスミス経済理論の解釈をとりあげる。

まずほぼワーランドによりつつ通説的解釈を整理しよう⁸⁾。経済活動が利己心によって動機づけられるというスミスのもっとも基本的な行動仮説は、ニュートン体系における重力法則の役割に対応して人間社会という「偉大な機械」の中でその役割を演じている。利己心は経済運動を生み出す基本的な力 force である。多様な現象間の結合の鎖を提示し、一見無関係なように見える諸事実間の体系的結合を確立するという点で、われわれにとって自然現象を解明する重力も経済活動を解明する利己心という力も想像力にとって親しみやすいものである。ワーランドは、このような通説が妥当であるならば、スミスの市場メカニズム分析がニュートン『プリンキピア』の公理と定義に適合しなければならないと見る。そこで『国富論』第1編第7章の自然価格論の検討となる。

まず自然価格論の概要を確認しよう。スミスによれば、一般的に、財の自然価格は、賃金・利潤・地代の自然率 (=通常率=平均率) から構成される。ある財の自然価格が、その自然要素価格を支払うのにちょうど過不足なく一致している時に、その財は自然価格で販売される。現実の価格、市場価格は自然価格を上回るか、下回るか、一致するかである (WN I. ii. 3, 4, 7. 訳 I. 94~6頁)。要するにそれは、需要と供給によって決定される。ただし急いで2点確認しておく、まずここでスミスのいう需要とは自然価格水準の需要量を意味する「有効需要」(effectual demand) であり、そして需給による決定とは次のような意味である。

「すべての商品の市場価格は、それが現実に市場にもたらされる数量と、その商品の自然価格、すなわち、それをそこへもたらすのに支払われなければならない地代・労働・利潤の全価値を支払う意思のある人々の需要との割合によって規制される。このような人々を有効需要者と呼んでよいし、かれらの需要は有効需要と呼んでよい。」(Ibid., I. vii. 8. 訳 I. 96頁)

供給量が有効需要量より少ない時、不足数量をめぐる買手間の競争により、市場価格は自然価格より多かれ少なかれ上昇する。これに対して供給量が有効需要量を超える時には、「一部分はそれ以下でなら支払う意思のある人々に売られ」やがてその低価格が「全体の価格を引き下げるにちがいない」。超過数量をめぐる売手間の

競争や財の性質により市場価格は自然価格より多かれ少なかれ下落する。そしてあらゆる財の供給量は、有効需要量に等しくなる自然的傾向がある (Ibid., I. vii. 9-11. 訳96～8頁)。

ある財の市場価格が自然価格以下の場合、資源が当該市場から退出して、やがて供給量は有効需要量まで減少し、各要素報酬は自然率まで上昇し、市場価格は自然価格まで上昇する。これに対して、市場価格が自然価格以上の場合には、資源が当該市場に参入してきて、やがて供給量は有効需要量を満たし、各要素報酬は自然率まで下落し、市場価格は自然価格まで下落する。自然価格・市場価格・要素価格は、以上のような関係にある。こうしてスミスは自然価格の性質を次のように結論している。

「それゆえ自然価格はいわば中心価格であって、そこに向かってすべての商品の価格が絶えずひきつけられている。さまざまな偶然の事情が、時にはこれらの商品価格を中心価格以上に高くつり上げておくこともできるし、また時にはいくらかその下に押し下げることもあるだろうが、このような静止と持続の中心に落ち着くのを妨げる障害がなんであろうと、これらの価格は絶えずこの中心に向かって動くのである。」 (Ibid., I. vii. 15. 訳 I. 99頁)

以上がニュートン主義の用語を利用したといわれているおなじみの自然価格論である。それでは自然価格論のニュートン主義的解釈に入ろう。まずほぼワーランドによりつつその解釈を整理しよう。自然価格への市場価格の調整、有効需要量に均等化される供給量の基本的な力は、原子論的な利己心の力である。市場均衡を実現する資源配分が個々人の利己心の追求によって達成される。市場システムの安定化の基礎力として利己心は市場の重力である。以上のように機械論のアナロジーが自然価格論の基礎となっている。

さらにワーランドによれば、スミスは、当該分析が特定の観察された現象を説明している点を示そうとしている点で、『光学』 (Newton 1979. pp. 404-5. 訳356頁) が指示する理論のテスト、「説明の証明」に則っている。自然価格論におけるその現象例は「(i)封鎖…や飢饉…の場合の…必需品の法外な価格」「(ii)超過供給が耐久品の価格下落よりも非耐久品の大きな価格下落をひき起こすという事実」「(iii)供給が変わりやすい天候によって左右されやすい農産物市場の価格は、工業製品市場の価格よりも大きく変動するという事実」である (Worland 1984. p. 607. cf. WN I. vii. 9, 10. 訳 I. 97頁)。

さてスミスの説明はニュートン主義の機械論の説明に適合しないと主張するワーランドの解釈 (Worland 1984. p. 607-8.) に入ろう。ワーランドは、理論が運動の公理によって分析可能な「超微視的プロセス」submicroscopic processes を前提としていなければならないというナーゲル (Nagel 1991. pp. 170, 172. 訳2. 25～6頁, 28頁) の機械論的説明の資格条件⁹⁾をスミスの自然価格論が備えていないと主張している。スミス理論は、個々の要素所有者が利己心の力によって需給均衡へ回帰する反応については、この条件をクリアーしている。しかしスミス理論には要素価格の決定に関しては原子論的説明がない。スミスは均衡値そのものを確定する基本的な力に対

するよりもむしろ均衡からの逸脱をひき起こすような攪乱要因，および社会状態の進歩・停滞・衰退という一連の曖昧な歴史的要因に言及しているにすぎない。スミスはナーゲルの機械論的説明の条件を満たす市場価格決定の調整プロセスにおける買手間の競争や売り手間の競争に言及しているのだから，市場調整のサブ・プロセスの説明がもっと明確でなければならない。市場の調整過程における利己心の力に反応する諸個人が，諸原子なり質量に相当するものとスミスが認めていたのだとすれば，いかにしてそうした力に反応する諸原子の運動が，市場の需給調整過程を生み出すのかが説明されていなければならない。この説明は新古典派の消費者行動理論と企業理論にあたり，結局，スミスの機械論的説明は不十分である。さらにワーランドによると，スミスのサブプロセス分析の失敗は，スミスの分析が『プリンキピア』の「向心力とは，中心とするある一点に向かってあらゆる方向から，物体が引き寄せられたり，押しやられたり，またはなんらかの形でその方に向かわせられるところのものである」という定義 V (Newton 1962. vol. 1. p. 2. 訳61頁) に適応できないという事実を説明するものである。各市場の価格は一連の共通の要素価格によって決定されたコストをカバーするものでなければならず，A財の自然価格とB財の自然価格との間には暗黙の関係がある。しかしスミスには，消費者行動というサブプロセスの分析がなく，新古典派の一般均衡理論が示すような各均衡価格間の体系的関係を確定する代替補完関係の説明はない。厚生経済学という財の均衡変形率と均衡代替率の均等化のうち，スミスにあるのは，財の均衡変形率の間接的な説明のみである。以上のように，ワーランドはニュートンの定義と運動の3法則を規準としてスミス自然価格論のニュートン主義的機械論のアナロジーを不十分として評価している。

6. 資本投下の自然的順序論一流率の要請

ワーランドは，スミスの資本投下の自然的順序論という最適資源配分の基礎理論に進んで，これについても自然価格論と同様に，ニュートン主義的機械論のアナロジーとして不十分であるとの評価を下している。まず『国富論』第2編第5章の資本投下の自然的順序論とその修正について，ワーランドの論点に即してその要点をまとめると以下のようになる。

まずスミスは各産業部門の付加価値が異なる点を次のように述べている。

「同一の資本量によって活動させる putting into motion ことのできる労働量は，それらの用途の多様性に依拠してひじょうに異なっている。同様に，資本の用途が異なれば，この国の土地と労働の年々の生産物に付加される価値もひじょうに異なっている。」(WN I. v. 12. 訳 I. 562頁)

経済は，小売業，卸売業，製造業，農業の4部門からなる。この4部門の中で付加価値は，農業，製造業，卸売業，小売業の順に大きい。結論としてスミスは次のように述べている。

「農業に用いられている資本は，…製造業に用いられているどんな同一の資本よりも，より多量の生産的労働を活動させるばかりか，それが用いる生産的労働量

に対する割合の点でも、その国の土地と労働の年々の生産物に…ずっと多くの価値を付加する。」(Ibid., I. v. 12. 訳 I. 569頁)

資本投下の自然的順序論は重農主義的見解であるが、しかしスミスは重農主義者ではなく、次のようにも述べている。

「資本を用いるこの4通りの方法のいずれも、他の3つの方法の存在または拡大にとって、またその社会の一般的な便宜にとって、本質的に必要な essentially necessary ものである。」(Ibid., I. v. 3. 訳 I. 563頁)

同種の言明は次のように第4編第7章第3節の資源配分論の中にも現われている。

「同額の資本が、それを遠隔地に投資すれば、近隣の事業に投資した場合と同量の生産的労働を決して雇用しえないことは明らかであるが、遠隔地の投資事業がその社会の福祉のために必要だという点では、近隣事業と同じである。」(Ibid., IV. vii. c. 87. 訳 II. 408頁)

各産業部門が社会福祉・社会的便宜にとって本質的に必要であるというスミスの見解は、彼の資本投下の自然的順序論の修正となっている。

ワーランドは、この点を指摘し次のように批判する (Worland 1984. pp. 608-10)。スミスは資源配分論のロジックが自由主義政策と矛盾することがわかっていた。投資の生産性が自然に経済のある部門で他の部門よりも高くなれば、国民分配分の極大化は高生産性部門へと投資を推進することである。しかし資本投下の自然的順序論は、厳密なロジックとしては重農主義的政策の結論に達している。資本投下のパターンが市場を通じて作用する利己心の力によって決定される、とはスミスは論じてはいない。人為的により高い生産性の農業部門へ資源をシフトさせるために、スミスが批判した当の重商主義的な市場への意図的介入をすべきだ、とスミスは論じてしまった。なぜこうなってしまったのか。ワーランドによれば、スミスが資本投下の重要な局面が、純生産物の寄与ではなくその変化率にあるという点を理解できなかったからである。純生産物の極大化を実現するためには、生産物の変化率が各部門で均等化されなければならない。スミスは、ニュートンの流率の理論に無理解だったのである。ニュートンの第2法則に見られるように、ニュートン力学の世界観の革命的第1歩は運動ではなくて運動の変化の説明であった。変数の値ではなく基本的変数の変化率が説明されるべき重要な要因であるという事実認識は、ニュートン体系全体の基礎である。スミスは変数の値と変数の変化率の違いを理解できなかった。結局、スミスは各部門が少なからず「本質的に必要」という根拠のない主張で、分析の誤りを回避してしまった。以上がワーランドの解釈である。

こうして結果は、デカルト主義的なスミスとなってしまった。こうなるとスミスの自然価格論は、フォーリーの説く渦動理論の世界の次元に立ち現われてしまう。

7. 貨幣循環メカニズムの水力学的例証—流通の水路

本章ではまず貨幣論の循環のメタファーに注目して、その用例を検討してみたい。『国富論』の中でスミスが言及しているジョン・ロック、デイヴィッド・ヒューム、ジョン・ロー、リチャード・カンティロン等の貨幣論に循環のメタファーとアナロ

ジーがあることはよく知られている¹⁰⁾。たとえばヒュームは「わが国ではあらゆる人の口にのぼり、また私の知るところでは外国へもおよんで、英国人をまねて外国の著述家がよく使っているひとつのことばがある。それは流通 CIRCULATION ということばである。このことばはあらゆることの説明に役立つ」(Hume 1985. p. 636. 訳112頁)と述べている。このような循環言語の伝統がとりわけ充溢した『国富論』第2編第2章の貨幣論¹¹⁾における水力学のメタファーとアナロジーに着眼してみよう。

まずは貨幣循環メカニズムの水力学的例証をみよう。まず、仮定①として「ある特定の国の全流通貨幣が、ある時期に100万ポンドに達し、そしてこの額が、その国の土地と労働の年々の全生産物を流通させるのに十分であった。」次に紙幣の導入を想定する。仮定②「その後、さまざまな銀行…が、100万ポンドを限度として持参人払の約束手形を発行し、20万ポンドを各自の金庫に準備した。」そうすると「金銀で80万ポンド、銀行券で100万ポンド、紙幣と貨幣とを合計すると180万ポンド」が流通している。スミスはここで次のように考える。仮定③「年々の生産物」は100万ポンド分であって「バンキングのオペレーション」によって生産物が「直ちに増加するわけではない」。生産物の流通には100万ポンドで十分である。そこでスミスは次のように主張する。

「売買される財はまさしく今までと同一量なのであるから、その売買のためには、今までと同一量の貨幣で十分であろう。流通の水路 channel of circulation¹²⁾ という表現を用いてさしつかえないなら、この水路はまさしく今までと同じままである。」(WN II. ii. 30. 訳 I. 449頁)

この流通の水路の規模は、その国の年々の生産物すなわち実質国民所得ということになる。

さてそうすると過剰供給の80万ポンド分はどうなるのか。スミスは次のように流通の水路に即してこの点を説明している。

「100万ポンドあれば、その水路を満たすのに十分だとわれわれは仮定してきた。だから、この額を超えて、その水路に注ぎ込まれたものは何であれ、水路内を流れることはできなくて、あふれ出るにちがいない。水路に現に注ぎ込まれているのは、180万ポンドである。だから80万ポンドは、この国の流通界で使用される額を上回るために、あふれ出るにちがいない。」(Ibid. 訳同上)

スミスは、紙幣は国際的には通用力を持たず、通用力を持つのは金属貨幣だけと考えており、この80万ポンドは、金銀貨で外国製品購入代金として海外に流出すると考える。すなわち、次のような結果となる。

「金銀で80万ポンドに達する額が海外に送られるだろうし、国内流通の水路は、以前にそれを満たしていた100万ポンドの金属の代わりに、100万ポンドの紙幣で満たされることになるだろう。」(Ibid. 訳 I. 450頁)

以上がヒュームの正貨流出入メカニズムとよく対比される有名な箇所であり、ペトレラは、スミスのこの説を「余剰正貨の自動輸出原理」 automatic-export-of-surplus-metals principle (Petrella 1968. p. 218.) と称している。

さらに関連するスミスの貨幣論の原理となっている記述をみることにしよう。スミスは次のようにも述べている。

「どんな国でも、そこで容易に流通しうるあらゆる種類の紙幣の総額は、それがとってかわる金銀貨の価値、いいかえると（取引量は同一と仮定して）紙幣がまったくない場合にそこで流通するはずの金銀貨の価値を決して超えることはできない。…この超過分は海外に送ることもできなければ、この国の流通界で使うこともできないから、金銀貨と兌換されるためには、ただちに銀行に還流するにちがいない。多くの人々は、国内で自分たちの取引を処理するのに必要とする以上の紙幣があることにただちに気づくだろう。しかもかれらは、それを海外に送ることができないので、ただちにその支払いを銀行に請求するだろう。こうした余分の紙幣が金銀貨に代えられるならば、かれらは、この金銀を海外に送ることによって容易にその用途を見出せるだろう。…したがって、たちまちその銀行へのこの余分な紙幣全額の取付けが起こるだろう。もし銀行が支払いに難色やためらいを示すならば、取付けはさらにいちだんと大規模なものとなるだろう。というのは、これで引き起こされる恐怖が取付けを必然的に大きくするからである。」(WN II. ii. 48. 訳 I. 460頁)。

このようにスミスは、兌換紙幣を前提として、過剰紙幣の還流メカニズムが作用することを考えている¹³⁾。しかしまた一方でスミスは、実際には銀行が以上のようなメカニズムを理解できずに逸脱して過剰発行の状態になっていることを指摘している (Ibid., II. ii. 53. 訳 I. 463頁)。

さて次章ではスミス貨幣論・金融論の注目すべきメタファーとアナロジーは、水力学的なそれだけではないことを、以上のような紙幣発行の問題に対するスミスの記述をさらにたどることによって示すことにしたい。

8. 貨幣論・金融論のアナロジーとメタファー——流通の大車輪・機械・空中車道・ダイダロスの翼

本章では『国富論』第2編第2章において、スミスが論じた紙幣による貨幣供給の意義と問題を取りあげることにしよう。ここで特に注目すべきは、神学的な含意をもつ機械論ではなく具体的な機械とのアナロジー、水車、道路等のメタファーである。スミスは金属貨幣に代位する紙幣の導入を認めてその意義を説いている。その際、これがまず「固定資本 *fixed capital* と流動資本 *circulating capital* のうちの貨幣からなる部分とは、それらが社会の収入にあたえる影響に関するかぎり、互いにひじょうによく似ている」(Ibid., II. ii. 12. 訳 I. 441頁) と述べられているように固定資本と流動資本とのアナロジーの中で行われる。スミスはその比較の中で貨幣とは何か、次のように述べている。貨幣供給には材料として一定量の高価な金銀と一定量の熟練した労働というコストがかかる。貨幣とは「偉大ではあるが、高価な商業上の用具 *instrument*」であり、貨幣という用具は、「社会のあらゆる個人が、その生活資料、便益品、娯楽品をそれぞれ適切な割合で規則的に分配される」ための手段である (Ibid., II. ii. 13. 訳 I. 442頁)。「機械・用具」*machines and instrument* と

いう固定資本は、「総収入の一部でもなければ、純収入の一部でもない。」貨幣は、経済活動において機械・用具と同じような役割を果たしている。この点をスミスは道具という人為のメタファーを用いて次のように述べている。

「これと同じように貨幣は、それ自体は、社会の収入のいかなる部分でもない。しかも貨幣を手段として社会の全収入がさまざまな成員の間に規則的に分配されるのである。流通のこの大車輪 The great wheel of circulation は、それを手段として流通する財とはまったく別のものである。社会の収入は、すべてこれらの財から成り立っていて、これらの財を流通させる車輪から成り立っているわけではない。」(Ibid., II. ii. 14. 訳Ⅰ. 同上)

スミスは、このようにして貨幣とは「流通の大車輪にして商業の偉大な用具」(Ibid., II. ii. 23. 訳Ⅰ. 446頁)であることを説き¹⁴⁾、固定資本との比較を続けて、紙幣という用具のコスト節約のメリットを認める。まず貨幣と固定資本との比較を次のように述べている。

「固定資本を構成する機械や事業上の用具などは、流動資本のうち貨幣からなる部分となお次のような点で類似している。すなわち、労働生産力を減退させずに、そうした機械を備えつけ維持する経費の節約が行われるならば、それはすべて、社会の純収入の増大となるが、これと同じく、流動資本のうち貨幣を集めそれを維持する経費が節約されるならば、それはすべて、これとまったく同様に社会の純収入の増大となるという点である。」(Ibid., II. ii. 24. 訳Ⅰ. 同上)

そしてこの観点から、スミスは、金属貨幣に代替する紙幣という用具について次のように述べている。

「金銀貨の代わりに紙幣を代位させることは、きわめて高価な商業上の用具を、経費のずっとかからない、同じように便利な用具で置き換えることである。流通は新しい車輪で行われるようになるのであって、この車輪は、建造にも維持にも、古い車輪に比べて経費がかからないのである。」(Ibid., II. ii. 26. 訳Ⅰ. 447頁)

さらにスミスは、もっとはっきりと紙幣の導入を機械設備の導入とのアナロジーを用いて次のようにも述べている。

「金銀貨の代わりに紙幣が代位されると、全流動資本が供給できる材料、道具、生活資料の量は、それらを購買するのにいつも用いられていた金銀の全価値だけ増加するだろう。流通と分配の偉大な車輪の全価値が、それを手段として流通させられる財に追加されるのである。この操作 operation は、次のような操作とある程度は類似している。すなわち、ある大きい事業の企業家が、ある機械工学上の進歩 some improvement in mechanicks の結果、彼の古い機械設備を取りはずして、その価格と新しい機械の価格との差額を、彼が職人たちに材料と賃金を提供するファンドである流動資本に付け加える、という場合である。」(Ibid., II. ii. 39. 訳Ⅰ. 453頁)

このようにスミスは、機械の技術進歩とのアナロジーを用いて、紙幣という金融上の技術変化のメリットを説いたのである。

機械とは人間が製作したものであり、紙幣も同様である。紙幣の制作者は銀行で

ある。そこで貨幣のエンジニアリングたるバンキングの役割が大きな問題となる。スミスは、銀行家の「財産・誠実さ・慎重さ」に対する人々の深い「信頼」(Ibid., II. ii. 28. 訳 I. 447～8頁)を示唆するとともに「銀行業のもっとも賢明な操作」the most judicious operations of bankig を強調している (Ibid., II. ii. 86. 訳 I. 498～9頁)。スミスは、「商人が時々の請求に応じるために遊休させたまま現金で保有していなければならない資本部分」をはじめとして「本来の消費者のもとに分配される」のを媒介する金銀貨も、何も生産しないのであるから「すべてデッド・ストック」all dead stock であるという (Ibid.)。このデッド・ストックを解消するところにバンキングの役割がある。この点をスミスは次のように述べている。

「銀行業のもっとも賢明な操作は、こうした金銀貨の大部分を紙幣で代位することによって、この国がこのようなデッド・ストックの大部分を活動的・生産的ストックへと、つまり、この国にとって何かを生産するストックへと転換させることができる。」(Ibid. 訳 I. 499頁)。

このようにスミスは、経済活動水準を高める銀行業の賢明な操作による紙幣の意義を説いている。しかしスミスは、たとえ賢明であるにしてもその操作の限界・危うさを指摘せずには入られない。この点をスミスは、次のように述べている。

「ある国に流通している金銀貨は公道 a highway にたとえてみるのが、いちばん適切かもしれない。公道は、国の牧草や穀物のすべてを流通させて市場に運搬するけれども、公道そのものはこのどちらのひとかたまりも生産しない。銀行業の賢明な操作は、私のたいへん乱暴なメタファーがゆるされるならば、空中に一種の車道 a sort of waggon-way through the air を敷設することによって、この国がそれ自体としては、何もかも生産することのない公道の大部分をりっぱな牧草地や穀物畑に転換させることを可能にし、またそうすることによって、この国の土地と労働の年々の生産物をおおいに増加させることを可能にするのである。けれども次の点を承認しておかねばならない。すなわち、この国の商業や工業は、たとえ銀行業の操作によって、いくらかは増進するにしても、以上のようにいわば、紙幣というダイダロスの翼 the Daedalian wings of paper money で吊り下げられているのだから、金銀貨という堅固な地面 the solid ground of gold and silver の上を歩きまわる場合にくらべて、絶対に安全ということはいえない。」(Ibid. 訳 I. 499～500頁)。

スミスは「空中の一種の車道」を「乱暴なメタファー」と自ら認めているが、「紙幣というダイダロスの翼」¹⁵⁾も前者に劣らず乱暴かついかにも唐突で奇妙なメタファーだろう。銀行券を発行して鑄貨を節約することは、経済成長にとって必要であることを認めざるを得ないが、銀行券の過剰発行の可能性は、経済社会にとって不安であり脅威でもある。この緊張を反映して、スミスのレトリックが思わず奇妙かつ乱暴となってしまっているのかもしれない。

さて結局、自然的自由の侵害となっても安全な銀行システムが確立されなければならないことになる。すなわち銀行の約束手形の発行抑制についてスミスは次のように述べている。

「疑いもなく、このような規制は、ある点では自然的自由の侵害とみなすこともできよう。しかし少数の個人の自然的自由の行使は、もし、それが全社会の安全を脅かすならば、もっとも自由な政府であっても、政府の法律によって抑制されるし、また抑制されるべきもののなのである。…火災が広がるのを防ぐために隔壁を作るのを義務づけることもひとつの自然的自由の侵害であって、それはここで提案されている銀行業の規制とまさしく同じ種類の侵害なのである。」(Ibid., II. ii. 94. 訳 I. 505頁)

ここでは、スミスは、建築規制とのアナロジーを説得の手段として用いている。この文章はスミスの自由主義経済学における「政府のなすべきこととなすべからざることの区別」(Keynes 1972. p. 288.) の性格を知る上で有益だろう。上の引用文に先立ってスミスはスコットランドのエア銀行事件について詳細に解説している。さらにまたスミスは、ジョン・ローの有名なミシシッピ計画の基礎に「紙幣をいくらでも発行できるというアイデア」があると評し、ローの「壮大だが幻想的なアイデア」のスコットランドへの悪影響を述べている(WN II. ii. 78. 訳 I. 490, 492頁)。スミスは、銀行システムの規制をこのようなバブル崩壊やエア銀行の破産という現象の観察と分析から得たのであって、確かに「前もった想定」から主張したわけではない。

9. 交換論—犬の行動観察によって例証される経済的探究の指導原理

現在の生物学史の観点から見ると、19世紀にダーウィンの進化論は現在のように普及しておらず、ダーウィンの進化論からの当時の経済学への影響はありえない。シャバス (Schabas 1994) によれば、現代にいたるまで経済学はむしろ18世紀のスミスらが抱いていた人間本性論に則っている。またマーシャルの代表的企業という分類学的概念もダーウィン以前の生物学を示唆するものである (Limoges and Ménard 1994. p. 355.)。いまはマーシャルを論ずる場ではないが、マーシャルのいう経済学者がめざすべき経済生物学のメッカ (Marshall 1922, 1925) があるとすれば、そのメッカの特質は、さしあたって18世紀にあると想定することはもっとも無理がない。マーシャルとの継承関係の問題は別としても経済学と生物学の関連性問題として再構成の意義はあると思う。それでは経済生物学のメッカの特質を18世紀のスミスにたずねてみよう。

スミスは、『国富論』第1編第2章の中で犬と人間の比較論から分業原理としての交換性向を解き明かし、交換経済の成立を説いている。この人間と犬の比較も第7章と同様に、当時（古代ギリシアでも）広く哲学者に議論されたテーマであり、ロック、ベール、ホッブズ、ライプニッツそしてヒューム等に見られるところである¹⁶⁾。本章ではそのスミス版をみるわけである。

まずスミスは次のように犬の行動について述べている。

「この性向はすべての人間に共通なもので他のどんな動物類にも見出されないものである。動物はこの性向も知らなければ、他のどんな種類の契約も知らないように、同じ兎を追う2匹のグレイハウンドは、一種の協同動作をしているような

様子を見せる。どちらの犬も自分の仲間の方へと兎を追いやる。あるいは、仲間が兎を自分の方へと追いやってくると、待ち伏せしてとらえようと努力する。しかしこれは、いかなる契約の結果でもなくて、その特定の時点に、同一の目的物をめぐって、かれらの感情の高まりが偶然に競い合った結果なのである。犬同士が、1本の骨を別の骨と、公正に、しかも熟慮のうえで、交換するのを見た人はこれまで誰もいない。ある動物が別の動物にむかって、その身振り生まれつきの叫び声で、これは自分のもので、それはお前のものだ、それと引換えにこれをあげよう、といったようなことを表示しているのを見た人はこれまで誰もいない。動物は、人間または他の動物から何かを得たいと思うときには、それをしてくれる相手の好意に訴えるよりほかには説得の手段をもたない。子犬は母犬にじゃれついて甘え、スパニエルは、主人からのごちそうにありつこうとすると、ありとあらゆる芸をして、食事の主人の注意をひこうとつとめる。」(WN I. ii. 2. 訳 I. 24~5頁)

このように犬の行動を観察しても決して協力行動も交換行動も見られない¹⁷⁾。そして人間と異なり言語という説得手段¹⁸⁾をもたない犬はごちそうがほしいと身振りで訴えるしかないのである。スミスは、このように説明して「文明社会では、人間はつねに多くの人たちの協力と援助を必要としているにもかかわらず、全生涯を通じて、わずか数人の友情を勝ち得ることさえやつのことなのである。他のたいていの動物類の場合には、ひとたび成熟すると、完全に独立してしまい、その自然の状態の中で他の生物の助力をなんら必要としない。ところが、人間は、ほとんどつねに仲間の助けを必要としている」(Ibid. 訳 I. 25頁)と動物と対比して人間の相互依存性を強調する。そして、このあとは、あまりにも有名な利己心の学説が説かれている次第である。

さてここでスミスは、犬の行動観察から、食物を得るための犬と人間の行動とを比較して、人間の経済的特性を明らかにしようとしているわけである。エドウィン・キャナンは、上の引用文の中の犬同士の交換に関して、「どのような目的から1本の骨をもう1本と交換したりなどできるのものなか、まったくわからない」と『国富論』の編者注に記している(Cannan 1937)。このキャナンの注に対しては、ヴァイナーがスミスの学説の摂理論的解釈の中でキャナンに反論している。少々長い引用となるが、ヴァイナーは次のようにスミスの犬の記述の意味を見事に説明している。「物的宇宙に、動植物の有機的世界に、動物や人間の解剖学と生理学に、また人間が動物と共に分かち持っている才能に、多くの一連の先駆者が、一種の摂理論的説明を体系的にあたえた。スミスは、人間のあまり合理的ではない行動様式にまでこの説明を拡大している。しかもこれは私の知っているものの中で唯一の体系的で巧みな推論であると思う。／「共感」というのは「感情」の装置全体の働きの心理的様態についてスミスが使った用語である。この装置すべてが人間に固有のものであり、あまり合理的なものではない。これは、人間が動物と共有する本能が終わるところで始まり、人間の理性が始まるところで終わる。このように、これは動物的本能と人間理性の間にある心理的領域である。／このあまり合理的

ではない領域に、スミスは、人間を交換に従事させる心理的性向をもおそらく含めたのだろう。人間のみが物々交換をする。…もしスミスが単に「犬同士が、1本の骨を別の骨と交換するのを見た人はこれまで誰もいない」と言ったならば、彼の論旨をもっとはっきり、より巧みに表現できただろう。…/キャナンは、…スミスの犬に関する言及について「この骨と骨との交換は何の目的でなされるのか明らかではない」と評しているが、彼はスミスの論点を見誤っているように思われる。まず第1に、ある犬は髓骨を好むだろうが、一方それをあつかうほどに、十分に強健な顎を持たない犬は、もっと小さい骨を好むだろう。第2に、スミスは「取引や交易しようとする性向」は人間の中の基本的な才能なのかどうか、したがってなんら意識的目的を持たないものなのかどうか、あるいは合理的根拠を持っているかどうかを自問している。この性向におけるいっそうの発展が、すなわちその分業への発展が理性と計算の助けを得て行われることをスミスは一瞬たりとも疑っていない。」(Viner 1972. pp. 79-80. 訳104～5頁)

また内田義彦氏もキャナンを批判して、この交換が骨と皮の交換ではなく骨と骨との交換でなければならないと見る。そしてスミスの犬と骨の話にイソップ童話の伝統を見て、人間の全体像を把握する文学としての社会科学を説いている(内田1992.108～110頁)。

さてこのようにまずスミスは、人間と動物の差異、「すべての人間に共通なもので他のどんな動物類にも見出されないものである」人間に画一的に見られる本性を指摘するところから説き起こした。そしてこのあとに、有名な利己心論を展開し、ついで今度は人間間の差異、才能の差異から交換性向論を展開している。スミスによれば、「人それぞれの生得の才能のちがいは、われわれが思っているよりも実際にははるかに小さい」(WN I. ii. 4. 訳I. 28頁)ものである。学者と荷担ぎ人足に見られるような人間同士のもっとも大きなちがいは、「習癖、習慣、および教育」(Ibid.)という環境的・社会的要因によるものである。スミスの考えでは、人間に交換性向がなかったならば「誰でも自分の求める生活の必需品と便宜品とをことごとく自分で調達しなければならなかったはずである。全員が同一の仕事をしたにちがいない。そして才能に大きなちがいをもっぱらひき起こすような仕事についてのこのようなちがいは生じえなかっただろう」(Ibid. 訳I. 29頁)ということになる。交換性向こそ「さまざまな職業に携わる人々の間に、このようなはっきりとした才能のちがいを形成する」し、また同時に「その才能のちがいを有用なものにする」わけである(Ibid., I. ii. 4. 訳I. 29頁)。

以上のように説いたあと、スミスは再び動物と人間の比較を行っている。スミスの犬との比較はまだまだ続く。まず生まれつきの能力差は動物の場合には、歴然としている。その差は、人間間の差と比較するとどの程度だろうか。スミスは、この点を次のように述べている。

「すべて同一種と認められる多くの動物種族は、習慣や教育の影響が加えられる前に、人間の中に生じると思われる才能の差異よりも、はるかに顕著な差異を生得のものにしている。生まれつきからいえば、学者(philosopher)が才能や性向の

点で、街頭の荷担ぎ人足 (street porter) とちがうところは、マスティフとグレイハウンドとのちがい、グレイハウンドとスパニエルとのちがいの半分ほどにもおよばない。」(Ibid.)

しかし、こうした犬に見られる動物の生得能力の大きな差異によるあるものの高い能力も相互依存性＝協力の客観性というスミスの観点から見ると、まったくの無駄である。すなわちスミスは次のように述べている。

「これらさまざまな種族の動物は、すべて同一種であっても、互いにほとんど何の役にも立たない。マスティフの力の強さは、グレイハウンドの敏捷さからも、シェパードの従順さからも助けを借りることはまったくない。交易し交換しようという力や性向が欠けているために、そうしたさまざまな天分と才能の効果は、ひとつの共同のストックにすることができず、かれら種族の生活と条件と便宜を向上させるうえで、少しも貢献しない。どの動物も依然として個々独立に自給自衛しなければならないし、また自然が仲間たちを区別したあの才能の多様性からいかなる種類の利益をも享受していないのである。これに反して人間のあいだでは、はっきりちがった天分が互いに役立つわけである。すなわち取引し交易し交換するという普遍的性向によって、人間のそれぞれの才能が生みだすさまざまな生産物は、いわばひとつの共同ストックとなり、誰でもそこから他の人々の才能の生産物の中から自分の必要とするどんな部分でも購入することができるのである。」(Ibid. 訳 I. 29～30頁)

以上、『国富論』第1編第2章を動物・犬と人間の比較に着目して経済人類学的に再構成してみた¹⁹⁾。スミスは、結局、交換性向を言語能力の必然的帰結としての側面をもつものとして把握している。またスミスは「説得手段」と述べていたが、説得の意義については『道徳感情論』『法学講義』『修辞学・文学講義』等の議論によって傍証されるところである。交換性向の基礎になっているのは説得本能であり、そして説得を可能にしているのは、言語能力なのである。

まずは動物と異なって人間ならば共通に持っている交換性向に意義をとどめて、あるいは人間における広義の交換を視野におさめて、そこから経済学へと焦点をあてていくことになったのである。こうしてスミスの方法論に即していえば、スミスは、経済「学的探究を導き方向づける諸原理」(EP 1980)をわれわれにとって身近で「なじみ深い」犬の行動観察によって「例証」したわけである。

なお以上に見てきたこのようなスミスの人間と動物の比較は、そこから人間の起源をつきとめようとする探究ではない。19世紀に本格化する人間の起源に関する論争の先駆ではない。以上に見てきたように、あくまでも力点は人間の経済的特性把握にあって、これを明らかにするための比較であった。

10. 循環概念の変容

前章の動物行動論は、本稿のテーマのひとつである循環概念とは直接関係はないかもしれないがそれが分業論であることには留意しておきたい。スミスはつづく第1編第3章を「分業は市場の大きさによって制限される」(WN I. iii. 訳 I. 31頁)と

題している。市場の大きさで具体的にスミスが説いていたのは、河川交易の重要性であった。分業を制約する市場経済は流水系にウェイトをもっているのである。なお経済が流通の水路によって制約されることは、第7章で見たとおりである。

さて次章からスミスのケネー批判と重商主義者批判を検討するが、それに先立って機械的循環概念と身体的循環概念の異同の問題を論じたオルボーン (Alborn 1994) の所説を再度、確認しておくことにしよう。オルボーンは、〈商業を規制する「自然経済」の自己充足＝自動調整経済＝血液循環のイメージ＝外部の干渉・介入から自由な経済・人体の機能を発揮させるスミスのモラル〉と〈人間の自然に対する機械的支配＝蒸気機関のような人間が統御する循環メカニズム〉(Ibid., p. 177.) とに分けて以下のように考察している (Ibid., p. 178.)。経済の自然的作用を補完するために人間の才能をいかに利用するかが「モラル」である。両概念は、19世紀には結局、対立概念となるが、スミスの場合には、基本的にはいまだ相反する概念ではなかった。

この点を敷衍すれば、自然の支配者が個人企業であるかぎり、その経済活動は自律的経済主体の行動を導くスミスの「見えざる手」のモデルと本質的に矛盾するものではない。個人は、各人の経済の自由な循環を妨げずに機械的循環主体を介して自然を操作することができた。機械的循環言語と身体的循環言語が一致しなくなったのは、大規模な機械の発明に伴う経済主体間の協力の新たな形態が必要になってからである。この新たな文脈において、自然の補完とは、自然のメタファーで記述される個人の経済活動を政府介入という機械の力で補完することを意味するようになった。オルボーンはスミスにおいて、この概念の意味のズレが生じている点を指摘している。それは銀行規制論で見たとおりであるが、もうひとつオルボーンが指摘している点は、分業の問題である (Ibid., p. 179-80.)。分業の自然発生と分業による財市場の自由な循環メカニズムは、機械分業のもつ資本家の独占化傾向と労働者の精神的・肉体的不健康のために政府介入によって補完せざるをえない。

さて次章からは循環プロセスにおいて工業生産物を不自然なものとして循環の起源を重視した重農主義者と富＝金銀と誤って循環の起源を無視して循環のプロセスから保護貿易を主張した重商主義者に対するスミスの循環言語による批判を検討することにしよう。

11. ポリティカル・エコノミーの医学—スミス対ケネー

本章では古来からある人体と政体、循環言語のアナロジーの中から展開されてくるスミスのポリティカル・エコノミーの原理を検討する²⁰⁾。すなわち『国富論』第4編第9章の中のスミスによるケネーの経済医学に対する批判をとりあげよう。

まずスミスによれば、ケネー等の重農主義者の人体の健康に関する考え方では、「人体の健康」を維持するには「もっぱら食事と運動に注意した一定の厳格な養生法」以外にはない (WN IV. ix. 28. 訳 I. 490～1頁)。この養生法に少しでも反すると、必ずその反した度合に比例して「病気や不調」に陥ってしまう。ケネーは政治体に関してもこれと「同種の考え」を抱いていた (Ibid. 訳 II. 491頁)。すなわち政治体も一定

の厳格な養生法を守らなければ富裕と繁栄を享受することはできない。この政治体の養生法は「完全な自由と完全な正義との厳格な養生法」でなければならない。

このようなケネーのリゴリズムのアナロジーに対して、スミスは、「人体は、厳格な養生法以外のさまざまな養生法でも、それどころか健康にはよくないと一般に信じられているようなとんでもない養生法でさえも、少なくとも見たところでは、完璧な健康状態を保っていることがよくある」(Ibid.)と画然とは割り切りがたい現実に観察されるところを強調している。スミスにいわせると、どうやら人体そのものの中には、健康「維持のある未知の原理」(some unknown principle of preservation) (Ibid.) が機能しているらしいのである。その原理には「誤った養生法でさえもその悪い結果を多くの点で予防・矯正しうる」力すなわち自然治癒力があるらしい。結局「自然の叡知」が「人体の中に」in the natural body「人間の怠惰と不摂生との」多くの悪い結果を治療するために十分な備えをしてくれたわけである (Ibid. 訳Ⅱ. 491～2頁)。

このようにして、スミスは、ケネーの厳格な養生法に代えて、この人体上の未知の原理を政治体に適用する。すなわち「政治体の中では、全員が自分自身の生活状態を改善しようとして絶えずしている自然の努力」が、政治体の「健康維持の原理」となっている (Ibid. 訳Ⅱ. 491頁)。この原理には「ポリティカル・エコノミーが多少は不公平で抑圧的であっても、その悪い結果を多くの点で予防・矯正しうる」力がある。不公平で抑圧的な経済政策は「富と繁栄にむかう一国民の自然の進歩」を確かに多少は遅らせるが、だからといって必ずしもそれを完全停止させるわけではなく、ましていわんや後退させることができるわけのものでもない (Ibid. 訳Ⅱ. 491～2頁)。「完全な自由と完全な正義」というケネーの厳格な養生法からすると「今までに繁栄しえた国民はこの世界にひとつとしてない」ことになってしまう (Ibid. 訳Ⅱ. 492頁)。結局、政治体においても「自然の叡知は幸いにも人間の愚劣さと不正の多くの悪い結果を救治するに十分な備えをしておいて」くれたわけである (Ibid.)。

スミスは、ケネー等の重農主義者を称して「まさしく思弁的な医師」a very speculative physicians といい、これに対して自説の根拠を「経験」experience が示す現実の健康状態と歴史上の現に繁栄してきた国民とに訴えて反駁している。ここで重要な点は、スミスの批判は、ケネーの有機体のアナロジーに対する批判であって、有機体のアナロジーそのものに対する批判とはなっていない点である。なお念のために確認しておくと、ケネーの学説は、アナロジーであるとともに字義どおりの意味があった。すなわち自然という土壌から始まる循環＝農業生産力に始まる経済の循環である。それがフィジオクラシーというものだろう。それを批判してスミスはスミスで別の有機体のアナロジーを提示しているわけである。ここでは論争が同一の有機体のアナロジーの文脈で行われている。ここにアナロジーの社会的力を見ることができし、経済生物学という、そういつてよければ経済学のメッカを見ることができるのではなかろうか。

以上、スミスのケネー批判の中に、スミスの「人体」と「政治体」とのアナロジーに関する所説を大略、見てきた。スミスのこの未知の原理にもとづく努力改善と回

復の生命観・人間観は、『国富論』の中の何か所かではっきりと確認することができる。『国富論』第2編第3章の資本蓄積論の中では、未知の原理について、次のようにやはり人体と社会とのアナロジカルな分析の中で言及されている。

「こうした節約や善行が、…たいていの場合、個人の私的な浪費や不始末ばかりでなく、政府の公的な濫費をも充分に償うものである。これは経験上から明らかである。自分の生活状態の改善をめざしての、あらゆる人間の画一的な恒常不断的努力こそは、私人の富裕はもとより公的な国の富裕が根源的に作りだされる原理である。この努力は、政府の濫費や行政上の最大の過誤にもかかわらず、改善をめざす事物自然の進歩を維持するにたるほど、強力な場合が多い。それは、動物の生命における未知の原理 (the unknown principle of animal life) のように、病気があっても、医師の処方が誤っていても、なお身体に健康と活力とを回復させる場合が多いのと同じである。」(WN II. iii. 31. 訳 I. 536頁)

このように未知の原理の学説は明解である。これに対してもっとも有名な「見えざる手」は『国富論』の文脈上、ふつうに読んでいけば、通過してしまうような語句であるし、スミス自身も渾身の力を込めて強調したわけではないと読むこともできる語句である。さらにまたよくいわれるように当時のありふれた語句でもあった。学説史上『国富論』の「見えざる手」には多くの解釈が施され含意が読み込まれてきた。しかし神学と無縁な多くの日本人にはやはりわかりにくいものが残る。そのような点から考えれば、スミスの学説の理解には、改善と回復の強力な未知の原理の方が、わかりやすいかもしれない。しかも未知の原理という自然治癒力は科学的説明としてはともかく現代ですら何か説得力を残しているように思われる。しかしもちろん「見えざる手」も未知の原理も、スミスの科学的説明における想像力にのっての親近性のある結合原理となる説得のレトリックであったということになるだろう。

12. 植民地貿易の生理学(1)—スミス対重商主義者

本章では、スミスにおけるケネーの影響の色濃い血液循環のメタファーとアナロジーを用いた重商主義批判をスミスのアメリカ植民地貿易論の中に見る。スミスによれば、英国によるアメリカ植民地貿易の排他的独占は、その巨大な植民地経営の資本不足のために大量の本国資本を植民地貿易へと駆り立てた。植民地貿易の排他的独占は「資本の中で自然に植民地貿易の方へ行く分よりもはるかに大きな割合を無理にその方へ向かわせ」そのために「英国産業の全部門間に独占がなければ生じるはずの自然的均衡 natural balance を全面的に破壊してしまった。」(WN IV. vi. c. 43. 訳 II. 368頁) 英国の産業構造は「多数小市場」向きではなく、主として「一大市場」＝アメリカ植民地に適するような構成となってしまった (Ibid.)。英国の商業の流れは「多数の小水路 channels」ではなく、主として「一大水路」を流れるようにならされてきたのである (Ibid.)。そのために「英国の産業と貿易の全体系は独占のない時よりも不安定となり、わが政治体 body politik の全状態が不健康なものになってしまった。」(Ibid.)。

このように述べてスミスは人体→諸器官→血管と血液循環のアナロジーを進めていく。英国の現状は、生命維持に絶対必要な器官が肥大しすぎた不健康な身体に類似している。各器官がよく釣り合った健康な身体であれば、めったに起こりそうもないような「さまざまな危険な病気」many dangerous disorders にかかりやすくなっている状態なのである。「その自然の容積以上に人為的に膨脹させられ」てしまった「大きな血管」that great blood-vessel, 「その中を通してわが国の商工業の不自然な割合が無理やり循環させられてきた」「大きな血管」, この大血管にいささかたりとも血液の停滞があれば、おそらく「全政治体の上に、もっとも危険な疾患をもたらす」ことになる。近隣のヨーロッパ諸国との貿易停止であれば、あたかも小さな血管のどこかで血液循環が停滞しても、血液は「いささかも危険な疾患をひき起こすことなく、容易に太い血管の方へ流れて行く」ようなものである。ところがアメリカ植民地との貿易停止となると、そうスムーズにはいかない。それはあたかも太い血管のどこかで血液循環が停滞して「その直接の不可避の結果として、痙攣、卒中または死となる」ようなものである (Ibid., IV. vi. c. 43. 訳Ⅱ. 369~70頁)。以上のようにスミスは生理学のアナロジーをもって、英国民のアメリカ植民地との断絶を恐れる心理構造を描いている。

そしてスミスは重商主義の帰結を次のように断罪している。

「英国の消費 [14,000樽] を超えてなおあまる82,000樽の煙草を輸入する船舶が、突然その仕事を失うことだけでもはなはだ痛切に感じられるであろう。これが重商主義体系のあらゆる規制がもたらす不幸な結果なのである！」 (Ibid. 訳Ⅱ. 370~1頁)

このような事態に対してスミスの提示した処方箋、基本的な改善方針は、ドラスティックではなく漸進的な自由化である。スミスの自然秩序の理念に即していえば「いかにして完全なる自由と正義との自然的システムを漸次回復すべきか」 (Ibid., IV. vi. c. 44. 訳Ⅱ. 371頁) が政策課題となる。それというのもこの植民地貿易を各国に一挙に開放することは、今となっては一時的な不便をひき起こすだけではなく、現在この貿易に労働なり資本なりを投入している人々の大部分に甚大な永久的損失を招く可能性が高いのである。重商主義体系のあらゆる規制は、政治体の健康状態にきわめて危険な病気をもたらすことになる。さらにそれだけではなく「少なくとも一時的にはさらに危険な病気をひき起こすことなしには、とうてい治癒しがたい病気」 (Ibid. 訳Ⅱ. 371頁) をもたらすことになる。

このようにスミスは重商主義批判とその帰結に対処する政策を生理学のアナロジーをもって語った。スミスのメタファーとアナロジーに着目しつつ彼のアメリカ植民地貿易論・重商主義批判・経済政策論を以上に見てきた。読者はアナロジーもここまでくると、過剰ではないかとの懸念も湧くはずである。しかも議論は『国富論』の中でも傍論というよりは、当時の政策問題・具体的問題としては最大の問題のひとつであった。スミスは「天文学史」においてケプラーのアナロジーの誤用を批判したが、スミスのアナロジーははたしてスミス自身がそこで設定した想像力の親近性規準、いいかえれば、込み入ったアナロジーは想像力がフォローしがたいと

いう規準に適っていただろうか²¹⁾。

13. 植民地貿易の生理学(2)―スミス対パウネル

循環言語・流通言語は、経済的議論の中で重商主義者、重農主義者そしてスミスと18世紀に広く普及していた共通の論争言語である。ここで当時、スミスのアメリカ植民地貿易論に対して批判した元マサチューセッツ州総督トマス・パウネルの見解を見ることにしよう。パウネルは、1776年9月、スミス『国富論』に対する長文の修正要求公開書簡を発表した。少々長い引用となるが、その中でパウネルは次のようにスミスの議論を鋭く批判している。

「あなたのお考えでは、植民地貿易に適用された不自然なバネが、そうでなかったならば英国産業のあらゆる部門に生じたであろう自然のバランスを破壊し、そしてまたその破壊は、1つの水路にとあまりにも多くが投じられました。その自然の大きさを超えて人為的に膨脹した血管というアイデアは、あなたの想像力を刺激しました。そしてあなたは、何かおそろしい混乱の不安にとりつかれたのです。この混乱はあなたが想定した事態としては英国を襲わなかったために、あなたは5つの、予測されず考えられもしなかった出来事を探し出したのです (cf. WN IV. iv. c. 45. 訳Ⅱ. 371～2頁)。…それらは幸いにも起こって、その混乱を阻止しました。わたしは政治について気で病む者 *malade imaginair* ではありませんし、しばしば起こると予測されてきた「痙攣、卒中または死」について心配してはいませんから、どのようにして事実に対して、それらについて深刻に議論することができるのか、私にはわかりません。わが国の貿易が、大きな突然の衝撃によって、痙攣や卒中を感じていないということ、わがアメリカの動脈は遮断されているが、その生産力は、動かされ続けているし、またその流通はいくつかの他の水路を通り続けていることは、アメリカの動脈がわれわれの商業の第一の水路ではなく、ましていわんや唯一の大水路ではないことを証明しています。わが国の流通のある部分またはたぶん大部分は、動脈を通じて他のより遠い導管へと通っていたのです。それはより多くの直接の水路を通して注がれて、英国の商人にとってより多くの利益をとまう相応なものとして今やたぶん満たされているのです。要するに、実際にあって、また現実にも見られるわが国の貿易の状態はすべて、理論上は、あなたの主張に対する反対証拠そのものであるように私には思われます。」 (Pownall 1776. pp. 372-3.)

このようにパウネルは、血液循環のアナロジーからなるスミスの経済生理学モデルを批判し、とりわけここでそのモデルの予測の失敗に対するスミスの方法論的態度を問題としている。ホルンダーは、このパウネルの批判をとりあげて、スミス体系が「モデルから引き出された結論の無責任な適用の例」であり、事後的弁明によって予測が否定されたモデルを守ることになっており、ラカトシュのいう退行的研究計画となっていると指摘している (Hollander 1987. p. 323. 訳407頁)。

重商主義者やケネーの用いた循環言語に即してかれらを批判したスミスが、今度はスミスの用いた循環言語に即してパウネルによって鋭く批判されているのをここ

に見ることができるわけである。

14. 結論と若干の展望

本稿では『国富論』のニュートン主義解釈に関してワーランドの説をかなり詳しく紹介した。スミスの自然価格論と資本投下の自然的順序論は、ワーランドによる徹底的なニュートン主義の規準から解釈すると論理的に矛盾していた。しかしそれはスミス理論の別の観点からの整合的解釈を認めないとか妨げるとかいうことではあるまい。それはひとまず別の問題である。

またワーランドの解釈は、古典の現代的解釈・絶対主義的解釈に見えるし、そういう部分が確かにある。しかしワーランドがニュートン理論からスタートしている以上、現代理論がニュートン主義にもとづくものを持っているからそうになってしまうという部分があるはずである。これを確定すれば、ワーランドの解釈がスミスに対してフェアなのかアナクロニズムであり酷であるのか、いずれかがもう少し明らかにできるだろう。しかしこの確定は次回以降の課題としたい。

そしてワーランドの解釈の結果は、デカルト主義者スミスを指示していた。以上のワーランドのアプローチに対して、最初からデカルトの渦動理論で徹底的に解釈したのがフォーリーであった。「天文学史」においてスミスは親近性規準からみて、デカルト体系の親近性をひじょうに強調しながらも、同時にニュートン体系の説明になるとデカルトよりニュートンに軍配をあげている。これは強弁といえないこともない。フォーリーのデカルト主義解釈を支持するかどうかは別としてデカルト主義者スミス像はどうしても拭いがたい。スミスにおける科学理論体系の重要な規準のひとつが想像力にとっての親近性である点は、「天文学史」から容易に確認できるし、スミス天文学史研究者たちも強調しているとおり明確である²²⁾。しかし何をもって親近性とするか、渦動か重力か、運動か力かは問題である。

デカルトとニュートンに共通する概念²³⁾があるように、本稿で見てきたように、重商主義者・重農主義者とスミスに共通する部分もある。スミスを重商主義者・重農主義者という者がいないように、ニュートン主義者スミスが、デカルト主義的側面があるからといって、ニュートン主義者スミスを否定するのはおかしいことだろう。なおこれはヒュームにもあてはまることである²⁴⁾。〈デカルト→ニュートン→スミス〉、〈デカルト→ケネー→スミス〉は、ただちにニュートン主義者スミスを否定することにはなるまい。

しかしワーランドのアプローチが示すように、ニュートン主義者として不可欠な部分をスミスが欠いているとすると問題はなお残る。機械論哲学、少数原理、想像力にとっての親近性等の諸論点は、ニュートンでもデカルトでもよい部分がある。ニュートンがデカルトと共有しないもの、ニュートンがデカルトともっとも対立する方法、これが重要である。そのような意味でニュートン主義でなければならないものは、実験・観察の重視と確固たる数学原理である。しかしニュートン主義の適用に際して、経験主義者スミスにとって前者はともかく、スミスに経済学の数学的原理はない²⁵⁾。もちろんこれはスミスの経済理論を数学的言語に翻訳できないとい

うことをただちに意味するわけではない。『プリンキピア』で翻訳した時の経済理論としての不十分さを指摘したのが、ワーランドであった。しかし結果は、まさに数学的原理が欠けているというものであった。かくしてともあれ数学的原理がない点が重要なズレが生じてくる点となった。この点から、スミス自身がニュートン主義を尊重しているにもかかわらず、真のニュートン主義者ではなく数学なき数学尊重のデカルト主義者と評されてしまうのもやむをえないだろう。そういう点がスミスには確かにあるわけである。

そうなると本稿でとりあげたスミス経済学は、デカルトの渦動理論や機械論的生理学でも統一的に解釈可能な余地がでてくる。ここにフォーリーのデカルト主義による統一的解釈の面白さがあり、循環概念史の重みも窺い知ることができるのかもしれない。またかりにスミスが、フォーリーのいう意味でかどうかはともかくデカルト主義者であるとしよう。そうするとスミスをニュートン主義者と呼んでしまう誤りは、たとえてみると（あまりうまいアナロジーではないかもしれないが、試みに）、ピーター・J・ボウラーにしたがって、ラマルキストのスペンサーを社会ダーウィニストと呼ぶのが誤りだとすれば²⁶⁾、それと似たような関係がスミスとニュートンの間にも若干は成立するのかもしれない。

さて本稿では、スミス経済学を自然哲学的関連からの再構成の端緒とすべく、スミスの体系を機械と有機体との概念の混淆的なものであるとの観点から、バランスをとるために力学だけではなく、後半では生物学・生理学言語の側面を強調してあわせ描いてみた。その特徴を総括的に整理しておこう。まず機械論に関しては、もうひとつのスミスの主著『道徳感情論』ほどは神学的色彩の濃厚な機械論ではなかった。これは有機体のアナロジーもそうであるが、『国富論』が精神世界よりも具体的世界を対象としているため、神学的議論の方向を要請しないからだろう。その分、『道徳感情論』より宗教的メタファーは少なかった。必要とあらば、スミスに立ち入った神学の議論が見られるのは『道徳感情論』が示しているとおりでである。

自然価格論を強いて神学的にだけ議論する必要はないだろう。水力学も神の介在の大車輪というよりは、水車、水運業の隆盛、海外との交渉の具体的イメージが強い。スミスの想像力の親近性規準からしても、読者にとって犬や身体言語は親しみやすい。また少なくとも神学的含意を陰伏した一般読者にとって議論を要する難解な機械論よりも具体的な水車などの機械装置や当時の水運業の隆盛の方がなじみやすいものである。なお見えざる手は、神学的含みがあるけれども当時すでに斬新ではなくありふれた定着していたメタファーであった。

機械論的言語による利己心の学説の経済の自然調和と有機体論的言語による自然治癒力や未知の原理のそれ、すなわち機械と身体の循環のメタファーの2種類の自己調整経済とは矛盾してはいなかった。〈機械＝有機体＝自然〉であった。ところがこれが〈自然＝有機体〉と〈人為＝機械〉に変容してくる。このズレは、産業革命による大規模な機械の発明にともなう経済の形態と構造変化による。これを反映して経済認識＝メタファー認識も変化してくる。スミスの場合にはこれが混在し、緊張を伴っていた。この循環言語の変容は、本稿では、貨幣論・金融論によって例

証したところである。発明という点で機械＝紙幣であった。紙幣発行の銀行規制に示されていたように、操作・規制・介入は、時計製作者という神学的含意をもつ機械論的な不可視の神の手よりも、機械の発明操作という可視の人の手へと次元を移し、ここに機械言語の意味の変容をみることができた。

有機体的アナロジーの多さは、重商主義者やケネーに応戦した論争言語としての特徴をよく示していた。スミスのケネー批判の自然治癒力や未知の原理は、現代的にも妙に説得力を残しているように思われる。しかし一方でスミスのアメリカ植民地貿易の生理学的議論には、当のスミス自身が批判する執拗なメタファーとアナロジーの過剰さの危惧がありはしまいか。ここに植民地問題に対するスミスの不安が反映してはいなかったか。そしてこれを衝いたのがパウネルの批判ではなかっただろうか。

以上、本稿では、スミス経済学における混在変容しつつある多様なアナロジーとメタファーが漲っていることをその自然哲学との関連から明らかにしたつもりである。そこでわれわれにとっては、われわれの時代の経済学におけるメタファーとアナロジーの構造解明というテーマが残る、と本稿はこのような立場に立つが、もしこのテーマを読者が認めるならば、スミスのケースはこのテーマに取り組む時のフレーム・オブ・レファランスの設定に示唆するものがあるのではないだろうか。さらにはまた翻ってスミスに対するそうした観点からの新しい解釈を施すときにも有益なものが期待できるのではないだろうか。

注

*引用させていただいた訳語・訳文は、主として本稿の文脈上の点から多少変更しているものがあります。ご容赦いただきたいと思います。

*スミスの著作からの引用箇所にかぎって、著作名を以下のように略記し、グラスゴウ版全集のパラグラフ表記とする。『国富論』=WN, 『道徳感情論』=TMS, 『哲学論文集』=EP, 『修辞学・文学講義』=LRBL, 『法学講義』の1762～3年ノート=LJ (A), 1766年ノート=LJ(B), 『書簡』=Corr. なお『国富論』は大河内監訳, 『道徳感情論』は水田訳の頁数を示す。

- 1) ケネー思想へのデカルトなどの自然哲学の影響については、たとえば Foley (1976. ch. 7), Christensen (1994) を参照されたい。
- 2) 本稿と関連する（実際は迂回するから直接関連はしないというべきか）スミスのレトリック研究について一言する。まず本稿と同一のメイン・タイトルをもつエンドレス (Endres 1991) は、『修辞学・文学講義』と『国富論』とのめずらしい関連研究である。エンドレスは、スミスが『修辞学・文学講義』の中で説明したソクラテス的方法とアリストテレス的方法 (LRBL 1983. ii. 134-7. 訳287～8頁) の『国富論』への適用例として第4編、特に第5章「奨励金」を強調している。次に同種のタイトルをもつブラウン (Brown 1994) は、レトリックを含むディスコースの観点から『道徳感情論』→『法学講義』→『国富論』へといたる道徳哲学から社会科学への変容のプロセスを描いている。

本稿では拙稿「スミスの科学方法論—スミス「天文学史」について—」(坂本 1986) における筆者の「天文学史」理解を前提として、さらにそこで考察したスミスにおけるニュートン対デカルトの問題を含めて、スミス経済学における自然哲学からの影響をメ

タファーとアナロジーの観点から考察する。したがって『国富論』を主要テキストとするため、「天文学史」からの詳細な背景説明はもはや省略する。また「天文学史」研究文献も今回、直接引用・参照したものを除いて網羅的にはあげない。なおスミスのメタファー認識に関しては、筆者は以前に機械・有機体・社会に分けて整理してみたことがあるが、『道徳感情論』の用例が中心であった（坂本 1990）。本稿ではそこからの議論の発展に努めつつ、スミスの経済学に進んで『国富論』にテーマを限定するため『道徳感情論』等のスミスの他の著作の詳細な議論も基本的には省略する。

- 3) スミスの時計論は『道徳感情論』(TMS II. ii. 3. 5. 訳136頁)に見られる。なお拙稿（坂本 1990a. 114～5頁）でとりあげている。
- 4) 機械論のメタファーとしては、『道徳感情論』の中で「宇宙」を「巨大なる機械」the immense machine of the universe (Ibid., VI. ii. 3. 5. 訳472頁), 「人間社会」を「崇高にして巨大なる機械」a great, an immense machine (Ibid., VII. iii. 1. 2. 訳399頁)と称している用例がある。さらに「宇宙という偉大なる機械」the great machine of the universe, 「秘められた歯車とバネ」the secret wheels and springs (Ibid., I. i. 4. 2. 訳24頁)「人間社会の偉大で巨大な構造」the great, the immense fabric of human society と「諸原子」atoms (Ibid., II. ii. 3. 4. 訳135頁), 「植物または動物体のメカニズム」the mechanism of a plant, or animal body (Ibid., II. ii. 3. 5. 訳136頁)と。また「体系」と「機械」(EP The History of Astronomy IV. 19., The History of Ancient Physics 9.), 「言語」と「機械装置」(LRBL Consideration concerning the First Formation of Languages 41.)のアナロジーも見られる。
- 5) 本稿本文中でとりあげる文献以外でスミスの経済理論を具体的に論じたものとしては、たとえばホランダー (Hollander 1977, 1987) を参照されたい。ホランダーは、スミスが科学にとっての公理的基礎、演繹的理論化という点でニュートン主義を尊敬しつつも経済学固有の方法として帰納の手続きを不適切、予測よりも勧告に関心を持っていたと論じている。
- 6) 自然価格論を本稿でとりあげた以外の自然科学からのアナロジーで解釈した興味深い例としては、マインツァー『複雑系思考』(マインツァー 1997. 327頁)を参照されたい。マインツァーには、スミス自然価格論をフィードバック機構をもつ自己組織化過程として解釈した図解がある (O. Mayr によっている)。しかし要素市場は無視されており、それなら経済学テキストによくある標準的な経済循環図を用いた方がよい。
- 7) デカルトを重視した研究としては、他に Mini (1974. ch. 4), Wightman (1980), 長尾 (1987), Mirowski (1988) 等を参照されたい。ミニは、経済学発生の背景にはデカルト認識論の普遍的な受容があり、近代初期の多くの経済学者が知識理論について広汎に著作を発表し、デカルトの後継者たることを立証しようとしたと説いている (Mini 1974. p. 10.)。さらにミニは経済学には現代にいたるまで主流派経済学のテキストの図解に見られるようにデカルト主義の基本的な性質が含意されているという (Ibid., p. 13.)。グラスゴウ版『哲学論文集』の編者ワイトマンは、「天文学史」におけるスミスの重力理論の無理解を指摘している (Wightman 1980. pp. 20-1.)。長尾氏はスミスをデカルト・ニュートン両者の中間へ位置づける (長尾 1987. 118頁)。ミロウスキーは、スミス『国富論』をデカルト・ケネーの系譜に位置づけている (Mirowski 1988. pp. 164-7. pp. 407-8.)。

デカルトの渦動理論に関しては、『哲学原理』を中心に『デカルト著作集』(デカルト 1973)を、デカルト自然学研究文献としてはエイトン (Aiton 1972, 1983), Foley (1976)

近藤 (1959) そしてスミス「天文学史」等を参照されたい。なお拙稿でスミス「天文学史」を中心として渦動理論について解説してある (坂本 1986. 7～9 頁)。またニュートン自然学は、実際にはニュートンのデカルトからの受容と対決によって形成されており、その比較の点も含めてニュートン研究および17世紀科学史研究がデカルト自然学理解にはひじょうに参考になるため、たとえば以下の諸文献も参照されたい。パート (1988), Koyré (1965), ロゼー (1974), Westfall (1977), 吉田 (1987)。

デカルトにせよニュートンにせよここでの議論は、まずはスミス学問体系の自然哲学からの影響があったことを前提にしているが、スミスが模範としたのは力学ではなく言語であった (Lindgren 1973. p. 6.) とする説もある。

- 8) ワーランドは、いまではスミス「天文学史」研究の古典的文献のひとつとなった感のあるトムソン (Thomson 1965) によって通説を整理している。
- 9) ナーゲルの条件は3つある。ワーランドによれば「変化は…システムにおいて作用する諸力の大きさの関数である」と「変化の方向はシステムに加えられた諸力の方向に向かう」という2つの条件に関しては、スミスはクリアーしている (Worland 1984. p. 607. cf. Nagel 1961. p. 170. 訳2. 25～6頁)。
- 10) ローリーは、貨幣思想における有機体的フロー概念の初期の有名な文献として13世紀のニコラス・オレームをあげている (Lowry 1974. p. 435.)。ヒュームに関しては、バーフットによれば、貿易差額論等に見られるヒュームの水力学のメタファとアナロジーの源泉は、エディンバラ大学におけるロバート・ステュアートの自然哲学講義にある (Barfoot 1990. p. 154.)。
- 11) スミス貨幣論に関しては、多くの研究があるが、本稿の関心から学んだ文献として、Laidler (1984), Hollander (1987) を参照されたい。レイドラーは、現代理論と水力学のタームのコントラストをうまくつけて再構成している。ホランダーは、取引の必要・還流の法則・真正手形学説というスミスの3原則として手際よくコンパクトにまとめている (Ibid., pp. 279-84. 訳350～6頁)。
- 12) 流通の水路は『国富論』第4編第1章の重商主義の貨幣概念批判の中でも次のように用いられている。「流通の水路はそれを満たすにただけの貨幣量を必ず引きよせるが、それ以上には決して受け入れない。」(WN I. i. 23. 訳Ⅱ. 98頁) また、第4編第5章には次のようなダムのアナロジーも見られる。「水門を開けば、ただちにダムの内側の水は減少し外側の水が増加して、やがてダムの内外は同水位になるだろう。税と輸出禁止を解けば、スペインとポルトガルの両国では、金銀の量は相当に減少するだろうが、それに見合って、他国では金銀はいくぶんか増加するだろう。そして金銀の価値、すなわち土地と労働の年々の生産物の量に対する金銀の量の比率は、やがてすべての国で同一またはほぼ同一の水準に落ち着くだろう。」(Ibid., IV. v. a. 19. 訳Ⅱ. 214頁)。
- 13) スミスの過剰紙幣の還流メカニズムの原理は、さらに銀行貸付における紙幣の過剰発行防止システムに関するいわゆる真正手形学説によって補強される。その際、スミスは、次のように池という水系のアナロジーによって説明している。「ある銀行が、ある商人の求めに応じて、真の債権者が真の債務者にあてて振り出した真の為替手形を割引くとしよう。そしてその手形が、満期になるやいなや、その債務者によってまちがいなく支払われるとしよう。このような場合には、銀行が商人に貸し付けるのは、もし貸付がなければ、その時々請求に応じるために遊休させたまま現金で保有しておかなければならない価値の一部分にすぎない。この手形が満期になって支払われると、それは、銀行が貸し付けていた価値を利子といっしょに銀行に償還するのである。銀行の金庫は、銀

行の取引がこのような顧客にかぎられているあいだは、ちょうど次のような池 a water pond に似ている。つまりその池は、そこから絶えず水が流れ出ているけれども、流出する水の分量にまったく等しいもうひとつの流れが、絶えず流れこんでいるような池である。だからとりたてて注意しなくとも、その池は、いつも同じか、またはほとんどまったく同じ分量の水をたたえているわけである。」(Ibid., II. ii. 59. 訳Ⅰ. 468頁)

- 14) ヒュームも貨幣論の冒頭において、貨幣を交換手段として道具と見なすが、車輪ではなく潤滑油のメタファーを用いて次のように述べている。「貨幣は、正確に言えば、商業の実体のひとつではなくて、商品相互の交換を容易にするために人々が承認した道具にすぎない。それはこの車輪の動きをより円滑にたやすくする油である。」(Hume 1985. p. 281. 訳33頁)
- 15) ゲーテ『ファウスト』に経済学的解釈を施したピンスヴァンガーは、スミスのゲーテへの影響を指摘している。ゲーテ『ファウスト』の中で宮内卿は次のように語っている。「すでに流れ出て人手から人手へと移っていったものを回収するのは不可能でございます。紙幣は稲妻のような速さで、もう全国に散らばってしまいました」(ゲーテ 1958.6086-7)。ピンスヴァンガーは、ここにスミスの「紙幣というダイダロスの翼」との結びつきを見ている(ピンスヴァンガー 1992.30~2頁)。
- 16) たとえば、ヒュームの『人間本性論』(Hume 1975)の中には「動物の自負と自卑について」「動物の愛情と憎悪について」「動物の理知について」という節があり、犬の記述も出てくる。ヒュームのケースは別の機会にあらためて検討したい。
- 17) 『法学講義』の中には猿の協力行動についての記述がある。「なるほど、ときには動物が協力して行動するように見える。しかしかれらの間に何か契約のようなものがあるのでは決してない。猿が果樹園から盗むとき、果実を順々に他の猿へと投げわたして、最後にこれをしまいこむ。だが獲物の分配についてつねに奪い合いが起こり、たいていはかれらのうちのある者は殺される。」(LJ (B) 222. 訳337頁)
- 18) 交換性向と説得本能と言語の関係に関しては、『国富論』以外のスミスの著作から確認することができる。まず『法学講義』では「もしわれわれがこの交換性向を基礎づける原理を人間精神の中に探究しようとするならば、それは明らかにだれもが持っている説得しようとする自然的傾向である。…人間はいつも当の事柄が他人にとってはとるにたりないときでさえも、自分の意見を他人に納得させようとする。…他人の意見があなたの意見といつもちがっていれば、あなたは不安を感じ、自分の意見と一致するように他人を説得しようとする。…われわれの全生活は、この説得力の行使に費やされるから、互いに取引する手近な方法が疑いもなく得られるにちがいない。」(LJ (B) 221-2. 訳337頁)と述べて、交換性向の基礎を説得本能に求めている。そして『道徳感情論』の方では、「信じられたいという欲求、他人を説得し、指導し指図したいという欲求は、われわれの自然的欲求すべての中でも、もっとも強力な欲求のひとつであるように思われる。それはおそらく人間本性の特徴的能力である言語能力の基礎となっている本能である。他のどんな動物も、この能力を所有していないし、またわれわれは、他のどんな動物の中にも、その同類の判断と行動を指導し指図したいという、いかなる欲求も発見することはできない。大いなる野心、真の優越性への欲求、指導し指図することへの欲求は、まったく人間に固有のものと思われる。そして言語こそは…それらのための偉大なる道具なのである」(TMS VII. iv. 25. 訳437頁)と言語能力と説得本能との関係について説いている。なお『修辞学・文学講義』では説得

手段としての言語表現の類型について論じている (LRBL i. 149-150. 訳157頁, ii. 130-7. 訳284~8頁)。

説得本能を重視したスミス研究としては、鈴木 (1984, 1992), Myers (1983), Young (1986) 等をあげることができる。鈴木信雄氏はスミスの説得本能は「アニマニテとユマニテを区別する一つのメルクマール」(鈴木 1984.36頁) として考えられていると指摘している。マイヤーズは「人間の相互作用の本質は、われわれ自身の感情に沿うよう他人を説得することであり」交換性向は共感原理の中で働くとして『道徳感情論』との明瞭な結びつきを強調している (Myers 1983. p. 113.)。またヤングは「この「不安」は、観察者に是認されたいという欲求から生まれる」として市場メカニズムの中に公平な観察者のメカニズムが含まれる根拠にしている (Young 1986. p. 369.)。こうした解釈はいずれも狭義の経済学にとどまらずスミス道徳哲学体系の枠組みの中で把握して見えてくるものだろう。この点でたとえば吉沢英成氏は交換性向を会話と同様、共感原理のひとつの現われと見て、利己心と経済的観点にかぎらないスミスの交換概念の広義性を指摘している (吉沢 1994.32頁)。なおフォーリーは、スミスの言語論、説得論、人間と犬の比較論に関して、彼のテーマにふさわしく、ギリシアのアンスロポロジーとの類似性を指摘し、スミスの思想的源泉を探索している (Foley 1976. pp. 91-2., p. 118., pp. 150-1.)。

- 19) スミスの経済人類学の再構成を完成させるためには、動物と人間の比較について、未開人と文明人、ヨーロッパ人と非ヨーロッパ人等の比較が必要であるが、次回以降にゆずりたい。さしあたって村松 (1985), 野沢 (1991), 鈴木 (1992) 等を参照されたい。
- 20) 面白いのは、経済学→医学という逆の方向がスミスに見られる点である。それは医療社会の問題に関するウィリアム・カレンの見解に対するスミスの議論である。スミスは経済学のタームでカレンに応答している (Corr pp. 173-9.)。なおこの問題をとりあげた研究として、野沢 (1991) 前篇第3章第1節を参照されたい。
- 21) マイヤーズは、アナロジーの誤用に対するスミスの批判的態度を強調している (Myers 1983. ch. 8.)。
- 22) ニュートン体系の親近性規準をおそらくもっとも重視してニュートン主義とスミスの関係について多くの論点を提示したスミス「天文学史」研究として只腰 (1995) を参照されたい。
- 23) デカルトの機械論哲学の近代科学への大きな影響とデカルトのニュートン運動法則への影響に関しては、バート (1988) をはじめ、ロゼー (1974), Westfall (1997), Koyré (1965), 吉田 (1987) 等を参照されたい。『修辞学・文学講義』のニュートン的方法 (LRBL . ii. 133.) がデカルト主義と同じである点に関しては、馬渡 (1990. 第1章), 只腰 (1995. 第2章第5節) を参照されたい。
- 24) ヒュームへのデカルトの影響に関しては、拙稿 (坂本 1990b) で検討したことがある。
- 25) スミスのアナロジーにおける数学の無視については、以前に『道徳感情論』の用例から考察したことがある (坂本 1990a. 110~1頁)。なお数学化による親近性の喪失については、Clark (1992. p. 40.), Sebba (1953. p. 261.) の議論からも推察できる。スミスの政治算術に対する態度については、Endres (1991. pp. 215-6.), 只腰 (1995. 218~21頁) 等の解釈を参照されたい。なおスミスを不完全なニュートン主義者とみなすクラークは、数学のほか実験がない点も強調している (Clark 1992. p. 40.)。
- 26) このようなスペンサーとダーウィンの関連はボウラー (1987. 第4章, 第8章, 第10章, 1992. 第7章, 1997. 第9章, 第10章) の繰り返し説くところである。なお本稿で

は進化論との関連には言及できなかったが、スミスとダーウィンとの関連についてボウラーは、スミスの分業論のダーウィンへの影響を指摘している（ボウラー 1997.133頁）。またボウラー（1987）第6章も参照されたい。ボウラーが見るようなスミス・マルサス→ダーウィン→社会ダーウィニズムという自然と社会との知の相互作用は、ミロウスキーのテーゼである（Mirowski 1994. p. 15）。

参考文献

- [1] Aiton, Eric John. 1972. *The Vortex Theory of Planetary Motions*. London and New York: Macdonald.
- [2] ————. 1983. 『円から楕円へ—天と地の運動理論を求めて』 渡辺正雄監訳, 共立出版（原書未公刊）
- [3] Alborn, Timothy L. 1994. Economic man, economic machine: images of circulation in the Victorian money market. in *Natural images in economic thought: "Market read in tooth and claw"* edited by Philip Mirowski. Cambridge: Cambridge University Press.
- [4] Barfoot, Michael. 1990. Hume and the culture of science in the early eighteenth century. in *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*. edited by M. A. Stewart. London: Clarendon Press.
- [5] ビンスヴァンガー, ハンス・クリストフ (Binswanger, Hans Christoph). [1985] 1992. 『金と魔術—『ファウスト』と近代経済』 清水健次訳, 法政大学出版局。
- [6] ボウラー, ピーター・J (Bowler, Peter J.) [1984] 1987. 『進化思想の歴史』（上・下） 鈴木善次他訳, 朝日選書。
- [7] ————. [1988] 1992. 『ダーウィン革命の神話』 松永俊男訳, 朝日新聞社。
- [8] ————. [1990] 1997. 『チャールズ・ダーウィン—生涯・学説・その影響』 横山輝雄訳, 朝日選書。
- [9] Brown, Vivienne. 1994. *Adam Smith's discourse: canonicity, commerce and conscience*. London and New York: Routledge.
- [10] バート, エドウィン・アーサー (Burt, Edwin Arthur). [1932] 1988. 『近代科学の形而上学的基礎—コペルニクスからニュートンへ』 市場泰男訳, 平凡社。
- [11] Christensen, Paul P. 1994. Fire, motion, and productivity: the proto-energetics of nature and economy in François Quesnay. in *Natural images in economic thought: "Market read in tooth and claw"* edited by Philip Mirowski. Cambridge: Cambridge University Press.
- [12] Clark, Charles M. A. 1992. *Economic Theory and Natural Philosophy: The Search for the Natural Laws of the Economy*. Hants: Edward Elgar.
- [13] Cohen, I. Bernard. 1994. Newton and the social sciences, with special reference to economics, or, the case of the missing paradigm. in *Natural images in economic thought: "Market read in tooth and claw"* edited by Philip Mirowski. Cambridge: Cambridge University Press.
- [14] デカルト, ルネ (Descartes, René). 1973. 『デカルト著作集』（全4巻）白水社。
- [15] Endres, A. M. [1991] 1994. Adam Smith's Rhetoric of Economics: An Illustration Using 'Smithian' Compositional Rules. in *Adam Smith: Critical Assessments. Second Series*. vol. 7. edited by J. Cunningham Wood. London and New York: Routledge.
- [16] Foley, Vernard. 1976. *The Social Physics of Adam Smith*. West Lafayette, In.: Purdue

University Press.

- [17] ゲーテ, ヨハン・ヴォルフガング・フォン (Goethe, Johann Wolfgang von). [1832] 1958. 『ファウスト』(上・下) 相良守峯訳, 岩波文庫。
- [18] Hetherington, Norriss S. 1983. Issac Newton's Influence on Adam Smith's Natural Laws in Economics. *Journal of the History of Ideas* 44: 497-505.
- [19] Hollander, Samuel. [1977] 1984. Adam Smith and the Self-Interest Axiom. in *Adam Smith: Critical Assessments*. vol. 1. edited by J. Cunningham Wood. London and Canberra: Croom Helm.
- [20] ————. 1987. *Classical Economics*. Oxford: Basil Blackwell. 千賀重義・服部正治・渡会勝義訳『古典派経済学』多賀出版, 1991年。
- [21] Hume, David. [1739-40] 1978. *A Treatise of Human Nature*. edited by P. H. Niddich. Oxford: Oxford University Press. 大槻春彦訳『人性論』(全4冊) 岩波文庫, 1948~52年。
- [22] ————. [1777] 1985. *Essays and Moral, Political, and Literary*. edited by Eugene F. Miller. Indianapolis: Liberty Classics. 小松茂夫訳『市民の国について』(上・下) 岩波文庫, 1982年。田中敏弘訳『ヒューム政治経済論集』御茶の水書房, 1983年。
- [23] Keynes, John Maynard. [1931] 1972. *Essays in Persuasion*. London: Macmillan/Cambridge University Press. 宮崎義一訳『説得論集』東洋経済新報社, 1981年。
- [24] 近藤洋逸. 1959年『デカルトの自然像』岩波書店。
- [25] Koyré, Alexandre. 1965. *Newtonian Studies*. Chicago: The University of Chicago Press.
- [26] Laidler, David. [1981] 1983. Adam Smith as a Monetary Economist. in *Adam Smith: Critical Assessments*. vol. 3. edited by J. Cunningham Wood. London and Canberra: Croom Helm.
- [27] Limoges Camille and Ménard Claude. 1994. Organization at work in Alfred Marshall's Principles of Economics. in *Natural images in economic thought: "Market read in tooth and claw"* edited by Philip Mirowski. Cambridge: Cambridge University Press.
- [28] Lindgren, J. Ralph. 1969. *The Social Philosophy of Adam Smith*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- [29] Lowry, S. Todd. 1974. The Archaeology of the Circulation Concept in Economic Theory. *Journal of the History of Ideas* 35: 428-44.
- [30] ロゼー, ジョン・プライス (Losee, John Price). [1972] 1974. 『科学哲学の歴史—科学的認識とは何か』常石敬一訳, 紀伊國屋書店。
- [31] マインツァー, クラウス (Mainzer, Klaus). [1996] 1997. 『複雑系思考』(第2版) 中村量空訳, シュプリンガー・フェアラーク東京。
- [32] Marshall, Alfred. [1890] 1920. *Principles of Economics*. 8th ed. London: Macmillan. 永澤越郎訳『経済学原理』(全4巻) 岩波ブックセンター信山社, 1985年。
- [33] ————. 1925. *Memorials of Alfred Marshall*. edited by. A. C. Pigou. London: Macmillan. 永澤越郎訳『マーシャル経済論文集』岩波ブックサービスセンター, 1991年。
- [34] 馬渡尚憲. 1990. 『経済学のメソドロジー—スミスからフリードマンまで』日本評論社。

- [35] Mini, Piero V. 1974. *Economics and Philosophy: The Origins and Development of Economic Theory*. Gainesville: University Presses of Florida.
- [36] Mirowski, Philip. 1988. *More Heat than Light: Economics as Social Physics, Physics as Nature's Economics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [37] ————. 1994. Doing what comes naturally: four metanarratives on what metaphors are for. in *Natural images in economic thought: "Market read in tooth and claw"* edited by Philip Mirowski. Cambridge: Cambridge University Press.
- [38] 村松茂美. 1985. 「スミスにおける哲学的探究とアナロジー——『天文学史』を中心に——」『熊本商大論集』31巻1・2合併号169～92頁。
- [39] Myers, Milton L. 1983. *The Soul of Modern Economic Man*. Chicago: The University of Chicago Press.
- [40] 長尾伸一. 1987「アダム・スミスと「ニュートンの方法」——天文学史と『国富論』の検討——」『思想』7月号102～25頁。
- [41] Nagel, Ernest. 1961. *The Structure of Science*. New York: Harcourt, Brace & World. 勝田守一校閲, 松野安男訳『科学の構造』(全3巻), 明治図書, 1968～9年。
- [42] Newton, Isaac. [1729] 1962. *Principia*. translated into A. Motte. revised by F. Cajori. 1934. 2vols. California: University of California Press. 河辺六男訳『自然哲学の数学的諸原理』中央公論社, 1979年。
- [43] ————. [1704] 1979. *Opticks*. edited by I. B. Cohen. New York: Dover Publications. 島尾永康訳『光学』岩波文庫, 1983年。
- [44] 野沢敏治. 1991. 『社会形成と諸国民の富』岩波書店。
- [45] Petrella, Frank. [1968] 1983. Adam Smith's Rejection of Hume's Price-Specie-Flow Mechanism: A Minor Mystery Resolved. in *Adam Smith: Critical Assessments*. vol. 3. edited by J. Cunningham Wood. London and Canberra: Croom Helm.
- [46] Pownall, Thomas. 1776. A Letter from Governor Pownall to Adam Smith. in Smith 1987.
- [47] 坂本幹雄. 1986. 「アダム・スミスの科学方法論——スミス「天文学史」について——」『創価大学大学院紀要』第8集1～19頁。
- [48] ————. 1990a. 「アダム・スミスのメタファー——自然秩序の諸相」『創価大学人文論集』第2号106～42頁。
- [49] ————. 1990b. 「ヒューム貨幣論におけるデカルト主義の影響について」『創価大学創立20周年記念論文集』186～95頁。
- [50] Schabas, Margaret. 1994. The greyhound and the mastiff: Darwinian themes in Mill and Marshall. in *Natural images in economic thought: "Market read in tooth and claw"* edited by Philip Mirowski. Cambridge: Cambridge University Press.
- [51] Sebbas, Gregor. 1953. The Development of the Concepts of Mechanism and Model in Physical Science and Economic Thought. *American Economic Review* 63: 259-68.
- [52] Smith, Adam. [1759] 1976. *The Theory of Moral Sentiments*. edited by A. L. Macfie and D. D. Raphael. Oxford: Oxford University Press. 水田洋訳『道德感情論』筑摩書房, 1973年。米林富男訳『道德情操論』(上・下) 未来社, 1969～70年。
- [53] ————. [1776] 1937. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. edited by E. Cannan. 大河内一男監訳『国富論』(全3冊) 中公文庫, 1978年。大内・松川訳『諸国民の富』(全5冊) 岩波文庫, 1959～66年。竹内謙二訳『国富論』

(全3冊) 千倉書房, 1981年。

- [54] ————. [1776] 1976. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner. Oxford: Oxford University Press.
- [55] ————. [1795] 1980. *Essays on Philosophical Subjects*. edited by W. P. D. Wightman. Oxford: Oxford University Press. 水田洋他訳『アダム・スミス哲学論文集』名古屋大学出版会, 1993年。佐々木健訳『哲学・技術・想像力—哲学論文集』勁草書房, 1994年。
- [56] ————. [1762-63] 1983. *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*. edited by J. C. Bryce. Oxford: Oxford University Press. 宇山直亮訳『アダム・スミス修辞学・文学講義』未来社, 1972年。
- [57] ————. [1762-3, 1766] 1978. *Lectures on Jurisprudence*. edited by R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein. Oxford: Oxford University Press. 高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』日本評論社, 1947年。
- [58] ————. 1987. *The Correspondence of Adam Smith*. edited by E. C. Mossner and I. S. Ross. Oxford: Oxford University Press.
- [59] 鈴木信雄. 1984. 「アダム・スミスの人間論」『東経大論叢』第5号1～42頁。
- [60] ————. 1992. 『アダム・スミスの知識＝社会哲学—感情の理論を視軸にして—』名古屋大学出版会。
- [61] 只腰親和. 1995. 『「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学』多賀出版。
- [62] Thomson, Herbert F. 1965. Adam Smith's Philosophy of Science. *Quarterly Journal of Economics* 79: 12-33.
- [63] 内田義彦. [1981]1992. 『作品としての社会科学』岩波書店。
- [64] Viner, Jacob. 1972. *The Role Providence in the Social Order: An Essay in Intellectual History*. Philadelphia: American Philosophical Society. 根岸隆・根岸愛子訳『キリスト教と経済思想』有斐閣, 1980年。
- [65] Westfall, Richard S. [1971] 1977. *The Construction of Modern Science*. Cambridge: Cambridge University Press. 渡辺正雄・小川真理子訳『近代科学の形成』みすず書房, 1980年。
- [66] Wightman, W. P. D. 1980. Introduction. In Smith 1980.
- [67] Worland, Stephen T. [1976] 1984. Mechanistic Analogy and Smith on Exchange. in *Adam Smith: Critical Assessments*. vol. 1. edited by J. Cunningham Wood. London and Canberra: Croom Helm.
- [68] 吉田忠 (編). 1987. 『ニュートン自然哲学の系譜—プリンキピアとオプティックスまで』平凡社。
- [69] 吉沢英成. [1981]1994. 『貨幣と象徴—経済社会の原型を求めて』筑摩書房。
- [70] Young, Jeffrey T. 1986. The Impartial Spectator and Natural Jurisprudence: An interpretation of Adam Smith's Theory of the Natural Price. *History of Political Economy* 18: 365-82.